

地元の木で旅立つ



サワラの木棺に入る筆者（59歳）

サワラの棺で「ウッドエンド」を

金子真治（埼玉県横瀬町・金子製材株）



元気なお年寄りが増えるのと裏腹に、亡くなる人も増えるのが高齢化時代だ。故人を送る棺桶も卒塔婆も木。その多くを輸入材に頼ったままでもいいのか!?

祖父が製材所を創業して90年余り。金子製材株は、関東近県のスギ・ヒノキを製材してきました。

秩父市では木育の一環として、6年前から赤ちゃんの誕生に合わせて木製玩具をプレゼントする「ウッドスタート事業」に取り組んでおり、私も木材組合の代表として当初から参加しています。その中で、「ウッドスタートがあるならば『ウッドエンド』があってもよいのでは」と思うようになりました。

地元の木で葬儀の棺ひつぎをつくれれば、将来的には地場産業となり林業の活性化にもつながる可能性があるからです。

比重の小さいサワラに着目

秩父市の森林面積は約5万haで、スギ、ヒノキ、サワラなどの人工林が伐期を迎



男性用は長さ192cm、幅58cm、高さ44cmで、厚さ1.2cmの板を使用



サワラを製材。節の少ないところを中心に板にする



山・里・川

耐久性、燃焼実験も

棺の製作にとりかかる前には、先行し

えています。スギ、ヒノキは住宅の構造材や内装材に適していますが、比重の小さいサワラは強度がやや低く構造材には不向きで、思うほど需要がありません。しかし、比重が小さいということは軽くて燃えやすいということです。サワラはヒノキに似て木肌が美しいという特徴もあり「ウッドエンドにはサワラの棺がいいかもしれない」と思いました。2016年当時インターネット調べたところ、日本では年間130万件以上の葬儀が行なわれており、そこで使われる棺の大半が輸入品(約9割が中国製)だと知って驚きました。環境問題を考えるとき、「ウッドマイルズ」という言葉が登場します。木材の産地から消費地までの流れに着目した際に、木材の輸送で排出するCO₂量や日本の木材の蓄積量を考えると、国産材の自給率の向上、それもできるだけ地元の木を使うことが、地球温暖化を防ぎ、世界の森林資源の保護にも役立つと思います。

1%の取り戻しで 地場産業が成り立つ

てカラマツの「ご当地棺桶」に取り組み長野県伊那市に向き、販売ルートや価格などを教えてもらいました。また、地元の葬儀会社と棺の大きさや重さ、耐久性を検討したりもしました。葬儀では社員が一人で組み立てや搬入を行なうため、棺の重さは22kg程度にすることをや、在庫場所の広さから「組み立て式」が好ましいなど、様々な意見が出ました。棺の中に約150kgの砂袋を入れてフォークリフトで吊り上げ、腰の高さで落とす実験もしました。さらに公営火葬場で燃焼試験も実施。燃焼速度や燃え残りなどを検証し、17年にサワラの木棺が完成しました。

サワラの棺は1基当たり15万〜20万円販売。仮に国内130万件の葬儀の1%を国産材の棺で行なうならば、年間1万3000基が必要になります。実現できれば、使われない木の利用拡大や地場産業としても成り立つのではないかと思います。

実際、反響もあります。神戸市の女性

*厚生労働省の試算によれば、年間の死者数は年々増えており、2039年に約166万人でピークを迎える。